

2016 パリ写真月間報告

2016 Paris photo report

市川 泰憲

Yasunori ICHIKAWA

Author JCII Camera Museum Steeringcommittie member

毎年11月のパリは、カメラや写真用品を主体とした展示会であるサロン・ド・ラ・フォト (Salon de la PHOTO) と写真作品を展示即売するパリフォト (PARIS PHOTO) やフォトフィーバー (Foto Fever) を中心に、多くの写真ギャラリーで作品展示が行われ、さまざまな場所で写真集を販売するブックフェアも開催され、さながら写真の街のようになる。

日本カメラ財団では2013年と2015年のこの時期にパリを訪問してフランスの写真事情を報告してきたが、2016年も11月9日～14日まで訪れたので、その概要を報告しよう。

11月中旬に、サロン・ド・ラ・フォトとパリフォトが開かれた。実は11月のパリに、フォトキナが開催された同じ年に訪れるのは初めてのことだ。それでも2013年と2015年と時間的な継続性をもって見てきたことにより、今までとは少し違った写真事情を読み取ることができたのが、今回の成果だ。

以下、主だったイベントと施設を紹介しながら、今日の写真界を取り巻く状況について、筆者なりの考察を加えてみる。

■サロン・ド・ラ・フォト (11.10-14)

すでに50年以上の歴史をもつフランス版のカメラショーである。カメラショーというと、ハードウェア中心のショーかということではなく、サロン・ド・ラ・フォト (www.lesalondelaphoto.com) は会場

の随所に写真作品展示スペースがあり、大きくスペースを割いた写真書籍販売コーナーには多くの人が熱心に本を求めている姿を見ることができる。

会場は、例年と異なる2階建てのホール5で、展示スペースとしては全体的に広がった印象がある。1階は主に用品関係、2階はカメラ関係という

感じで分かれているが、1階の入り口近くには、フランスのラボ機器メーカーのKIS社、インクジェットペーパーメーカーのキャンソン、ヨーロッパのインクジェット用紙



サロン・ド・ラ・フォトの会場案内パンフレット



前日にはパリ郊外で雪が降り、開会初日は小雨まじりの肌寒い天気であったが、多くの人が開場を待っていた



入口をくぐるとすぐ前にフランスのラボ機器メーカーであるKISフォト社のブースがある



キヤノンのメイン新製品はEOS M5



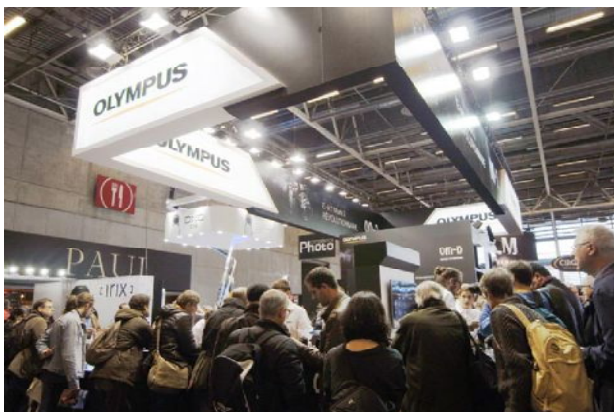
ニコンの新製品はアクションカメラのキーミッション



キヤノンの 'come and see' コーナー



ニコンの 'Nikon Bar Optiques' コーナー



オリンパスは新製品 OM-D E-M1 Mark II をメインに展示



ソニーのブースは天井から大小のレンズフードが吊り下がったイメージで構成されている

メーカーのイノバ、ハーネンミュレなどが陣取るなど、地元勢が目につく。

2013/2015年の過去2回を見た限りでは、この入口前にはアドビ社が構え、フォトショップのデモが行

われ多数の見物客が目についたが、今年はアドビ社の出展はなく、ホールの変更によりフランス企業が前面にでてくるようになったようだ。キヤノン社の裏には、やはりフランス企業のルミエール社がブースをだしている。ルミエール社はかつ



東京オリンピック意識して、マリオの帽子をかぶり安倍首相に似せた保母善将氏

ては感材メーカーであったが、現在は大型ストロボとベルボンの三脚やイルフォードの感材を扱っている。ここには会場内唯一の日本人解説員として、昨年同様にベルボンの保母善将氏が日本からヘルプに来ていた。

各社を見て歩くと日本企業は、オリンパス、キヤノン、ニコン、リコー、富士フイルム、ソニー、パナソニック、シグマ、タムロン、DNP フォトイメージング、エプソン、ノーリツ鋼機、ニッシンデジタルなどが出展してる。いずれもフランスなどの現地法人が出展しているようだ。

展示内容に関しては、9月にフォトキナが開かれたばかりであるために、新製品としては大きく変わるところはない。ここで注目したのが、キヤ



富士フィルムはX シリーズとGFX



リコーは、APS-C 一眼レフ、シータ、フルサイズ一眼のK-1



パナソニックはルミックスの4K フォトがメイン



タムロンはSP150 ~ 600mmF5-6.3Di VC USD G2 が話題



シグマの超望遠ズームは人気だ



シグマは、レンズとカメラが日本製であることをアピール

ノンの‘come and see’というコーナーだ。カウンターに来たお客さんの要望に応じて、背後の棚からレンズを持ちだして使ってもらい、質問を受けるコーナーだ。フォトキナでも人だかりだったが、国は変わっても、お客さんの求めるものは同じなのだろう。ニコンも‘Nikon Bar Optiques’という同様なカウンターを設けて人気だった。

どちらも盛況であったことからすると、新製品でなくともお客さんは呼べるというわけで、これからの新しい展示スタイルかもしれない。

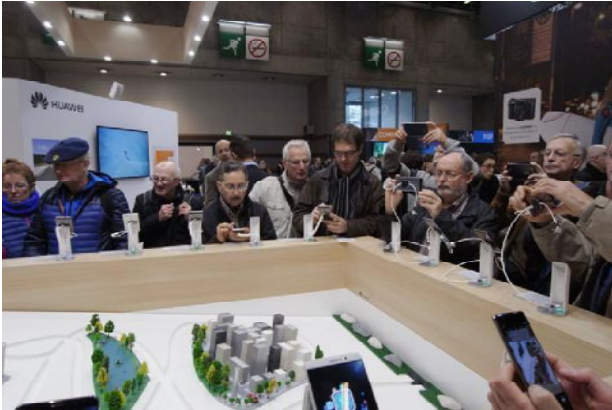
そしてもう1つ。シグマの製品の脇には‘MADE IN JAPAN’と札が立てられている。シグマは日本では‘MADE IN AIZU’を標榜しているが、昨今の

レンズ事情からすると日本製であることは1つのステータスなのだろう。

今まで日本のCP+とサロン・ド・ラ・フォトで大きく違うのは、ライカカメラ社が出展していたことだ。今回も、たぶん同じだろうとフロアを見渡すとキヤノンの隣の高い位置にライカの赤いマークがあるので、近寄って見ると「HUAWEI mate 9 CONCU AVEC Leica」と書いてあり、Leicaの部分が赤いライカのロゴマークなのだ。つまり、ライカカメラ社の展示はなく、中国のスマフォ企業HUAWEIが出展しているのだ。ファーウェイとライカカメラとの関係は、2016年2月に技術提携を結び、この9月には研究開発センターをライカカメ



キヤノンの隣は、ライカでなくファーウェイだった



ファーウェイのブースは、まるでカメラメーカーのように撮影体験コーナーがあり、さらにライカアカデミーのようにWebサイトまである(<http://huawei-photoacademy.fr/>)

ラ本社のあるウェットツラーに開設することを発表している。今後、ライカカメラとファーウェイがどのように協調していくのだろうか。今回のサロン・ド・ラ・フォトで気になった部分だ。

さらにもう1つ。9月のフォトキナでは、日本以外の新興交換レンズメーカーにどのようなものがあるか注意して見たが、ここフランスでも同じような視点で見まわしてみた。その結果、会場内には韓国のサムヤン（シネ用はXEEN）、中国のラオワが出展していたが、フォトキナでは見かけなかった‘irix’というスイス企業（irixlens.com）が11mmF4と15mmF2.4をキヤノンEF、ニコンF、ペンタックスKマウントで展示していた。このレンズはスイスでデザインして中国で製造ということらしいが、確かにデザインは洗練されている。

もう1社、初確認のSTARBLITZという企業は、‘STAR Lens’という35mmF1.8、25mmF1.8の2本をシルバー、ゴールド、ブラック仕上げで出品しているが、マウントは不明だ。このSTARBLITZ社はストロボや三脚を扱うが、どこの国に属するかわからない。レンズには中国製であることが明記されていた。この両社のレンズはいずれもマニュアルフォーカス仕様だが、今後は1960～70年代に日本の中小レンズメーカーがバイヤーズブランドで世界中にOEM供給していた時代のように、中国の光学企業が相手先ブランドで製造する時代がくるのではないだろうかと予想する。



‘irix’ レンズ



STARBLITZの‘STAR Lens’

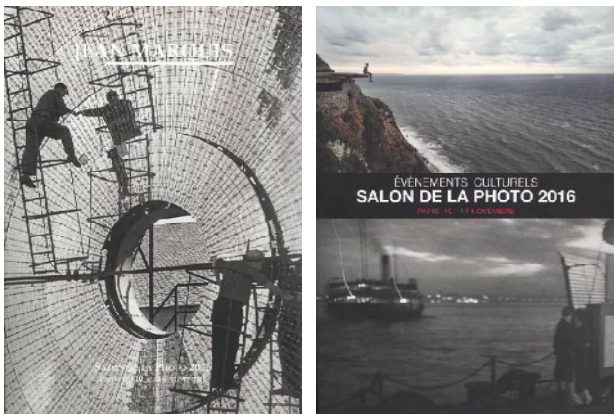


サロン・ド・ラ・フォトの会場では、毎回パリにあるヨーロッパ写真美術館の収蔵するオリジナルプリントが展示される。今年はマグナムに所属するフランス人写真家レイモン・ドゥパルドン（Raymond Depardon）の‘LA FERME DU GARET’が展示された

ここまではハード中心でサロン・ド・ラ・フォトを紹介してきたが、少し別な面から紹介することにして。実は、サロン・ド・ラ・フォトにあって日本のCP*にないもの、つまりフランスにあって日本にないもの、日本にあってフランスにないものということで考えてみると、①フランスのサロン・ド・ラ・フォトでは展示される写真の写真集図録はあってもカメラカタログはない、②会場内に写真展会場が10カ所もある、③会場内に写真書籍の販売コーナーがありにぎわっている、④カメラとレンズメーカーはなくても写真は盛ん、⑤会場内の食堂で生ガキやフォアグラが販売されワインを飲みながらゆっくり談笑できる、などである。



Un regard lumineux (La Grande Expo Jean Marquais)、マグナム所属の写真家ジャン・マルキ（1926～）の作品が展示され、一連の作品で2016年サロン・ド・ラ・フォトとして1冊の写真集ができていた



サロン・ド・ラ・フォトでカメラカタログは発行されないが、写真集は発行される。㊤ジャン・マルキ写真集「Un regard lumineux」ISBN:9788-2-9546818-2-5 (B5判96ページ、20ユーロ)、㊦サロン・ド・ラ・フォト2016公式写真ガイドブック、会場で飾られた写真のすべてが掲載されていて、ZOOMS入選者の山本氏と恩田氏のプロフィールと作品も収録されている。ISBN:978-2-9546818-3-2 (B5判96ページ、10ユーロ)

もちろん、日本のCP+でも、お苗場やフォトヨコハマに合わせた写真展示もあるが、どうしても写真の‘ハードとソフトの融合’という点ではフランス側に数日の長がある印象はぬぐえない。

今年のサロン・ド・ラ・フォトは、今までとは異なって、フランスと日本の写真雑誌編集者と一般の人がそれぞれ自国で選考するZOOMSという写真賞で、日本で選ばれた2人の若者の作品が、フランスで選ばれた2人の作品とともに会場に飾られた。このズームス写真賞はすでにフランス側が先行して実施してきたこともあり、2月に開催されたCP+2016にはフランスの受賞者2人が日本を訪れていた。今回サロン・ド・ラ・フォト開催初日には、会場内に設けられた特設ステージで、日仏ZOOMS入選者と編集者によるトークイベントが行われた。日本側は入選者の山本雅紀氏と恩田大輔氏。選考者側は、月刊カメラマン編集長の坂本直樹氏とPhaT PHOTO編集長の安藤菜穂子氏だ。

トークは、通訳を介して行われたが、用意されたほぼ100席はほとんど埋まるほどの人気であっ



ZOOMS 入選者の山本氏と恩田氏の紹介パネル



ZOOMS JAPONの入選者山本氏（手前）と恩田氏（奥）の作品展示コーナー



ZOOMS関係者によるトークショー。左はフランス側、右は日本側。右から、PhaT PHOTO編集長の安藤菜穂子氏、月刊カメラマン編集長の坂本直樹氏、入選者の山本雅紀氏と恩田大輔氏。通訳を介してのトークだったが、準備された約100の観客席はほぼ埋まった。トークショーの前にはCP+実行委員長の折原直人氏から横浜CP+2017の紹介もあった

たが、言葉を乗り越えて議論が活発になるほどのリアルタイムさがあれば、もっとおもしろくなっただろう。

■パリフォト（11.10-13）

パリフォト (www.parisphoto.com/) は、グラン・パレ (Grand Palais) で開かれた。この建物は1900年のパリ万博のときに建造された大型の展示場で地下鉄のシャンゼリゼ駅の近くに位置する。約180のギャラリーの作品展示、販売ブースに加え、28ブースで写真書籍の販売などが行われてい



パリフォトはパリ万博のときに建造された展示場を使う



展示場は明るい自然光が入るように工夫されている



タカ・イシイギャラリーは、正面入り口前にアルミ箔を揉んで貼りつけた派手な造作が目立つ



タカ・イシイギャラリーのご自身の作品コーナーの前に立つ築地仁さん



大阪の丹平写真倶楽部会員の1930～40年代のビンテージプリントを展示して人気を得たMEMギャラリー



今回初出展のEMONギャラリーは山崎博を推す

る。昨年は、会期中の11月13日にパリでテロがあったことにより、翌日からの展示は会期を半ばにして中止されたので、その影響が懸念されたが、今回われわれが会場を訪れたときは、祝日の金曜日ということもあって、かなり混みあっていて、入場制限が行われるほどの人気だ。

入場して、正面入り口前には日本のタカ・イシイギャラリーがある。なかに入ると、日本から来られた写真家の築地仁さんがご自身の作品の前に立っていた。築地さんの作品はまるで個展のようで、その展示形態からして、今年のタカ・イシイギャラリーのイチオシだとわかる。このほか荒木経惟、細江英公、石元泰博、鈴木理策、杉本博司

等の作品も見ることができる。

築地さんから作品の解説を行ってもらったが、このほか日本からのギャラリーで、初日に出品作品のほとんどに購入のピンが立っている所があると教えてもらい、行ってみると、確かにその通りだ。東京のMEMギャラリーで、作品は1930～1940年代の大阪にあった丹平写真倶楽部会員の河野徹、音納捨三、椎原治のフォトグラムなどを含むビンテージプリントだった。写真作品としてコレクションの対象は、1つには内容（作風）だろうが、時代を経たオリジナルの希少性というのも十分に価値のうちであることは間違いない。

また、今回初出展のEMONギャラリーは、山崎博



須田一政の「花姿花伝」シリーズ全作品138点を展示したAkio Nagasawa & Jean-Kenta Gauthierのブース



国が変われば作風も変わるので、作品のコレクション傾向も変わるのだろう (PARIS-BENJINのブースにて)

の作品だけで全体を構成していた。タカ・イシイギャラリーの築地仁がそうであるように、日本の人気写真家である森山大道と荒木経惟に対して、新世代作家への模索がなされているのではないかと考えた。とはいえ森山大道、荒木経惟に対する人気は現在も絶対的なものであるが、日本人作家ブームに合わせて新たな人材をギャラリーが発掘するのは当然のことだと思う。

パリフォトのVIPラウンジ入口は、昨年は森山大道と荒木経惟の作品で埋まっていたが、今年はラウンジスペースが小さくなり、特設ギャラリーが10ほど設けられていた。その一画、Akio Nagasawa & Jean-Kenta Gauthierは、すべて須田一政の作品「花姿花伝」で埋まっていたのは圧巻で、このような指向もポスト森山・荒木を模索している延長線上にあると考える。もちろんポスト森山・荒木だといっても世代交代をねらっているのではなく、むしろギャラリーとしては、世界的に通用する日本人写真家を増やすといったことが目途であるわけだ。

このほかKICKENギャラリーの新山清など、海外ギャラリーに展示されている日本人写真家も多いのだろうが、今回のパリフォトに出店した日本のギャラリーは、タカ・イシイ、MEM、YUMIKO CHIBA Association、EMONの4社だった。

また、書店出版社コーナーでは、セバスチャン・



セバスチャン・サルガドやウィリアム・クラインによるサイン会も行われるなど書店出版社コーナーも盛況だった



フォトフィーバーの受付。ループルカローセルでやるようになって4年目だが、受付と展示ブースが例年より洗練された感じがした

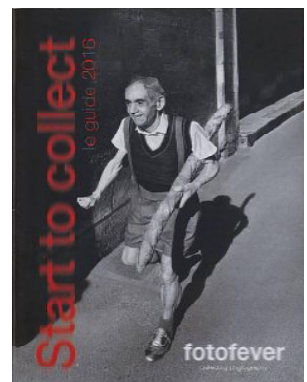
サルガドやウィリアム・クラインの写真集即売と本人によるサイン会が行われていた。このコーナーには、日本の小宮山書店、ブックショップM、TISSATO NAKAHARAの出店を見つけることができた。

■フォトフィーバー (11.10-13)

フォトフィーバー (www.fotofeverartfair.com) はループルの地下にあるカローセルで行われる。ここで行われるようになって今年で4年目だが、ブースの作りは、今までと変わり、よりこざれいになった印象が強く、当初よりだいぶ洗練された感じになった。

フォトフィーバーそのものは、基本的には写真を展示即売するという点で

は、パリフォトと大きな違いはないが、出展ギャラリーは昨年の102社に比べると、70社と少ないが、その分ゆったりと全体がレイアウトされている。今回は「Start to Collect」のテーマの下に、全体の展示ゾーンは「YOUNG」、「FOCUS」などとラフに分類されていた。会期中の11日(金)と12日



フォトフィーバーのパンフレット



アルバム写真を売るギャラリー



表紙にも使われたどこかで見たようなパロディー写真



アインシュタインスタジオの公募作品の展示



Start to Collect というが、入門には高いようだ

(土) には、VIP 向けにはコーヒーを飲みながらのディスカッションができる場が設定されるなど、特徴を持たせている。

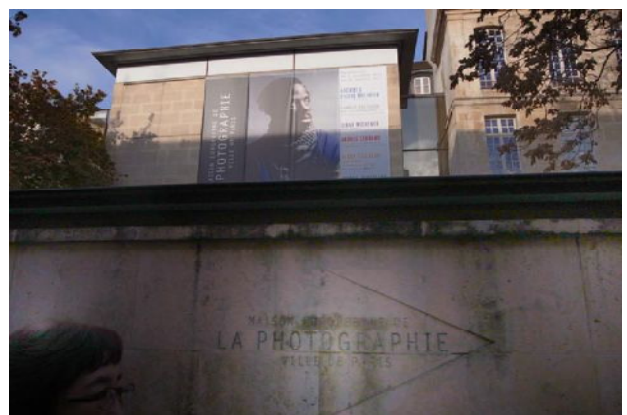
日本からは、G. I. P. 東京、ゼンフォトギャラリー、銀座ギャラリーG2、アインシュタインスタジオなどを見つけることができたが、去年は8社を数えたので、大幅減ということになる。

このうち東京から初出展のアインシュタインスタジオは、若い人たちから写真を公募し、この場で展示するという新しいスタイルだ。

また、それぞれのギャラリーの作品には、今回のキャッチフレーズである「Start to Collect」という黄色いステッカーをオススメの作品の脇に貼ってあったのは、より写真を気軽に購入して欲しいという新しい試みだそうだ。

■ヨーロッパ写真美術館 (www.mep-fr.org)

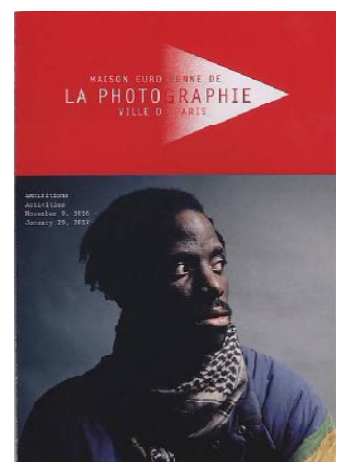
地下鉄サンポール駅から歩いてわずか2分ほど、セヌ川と駅の間ぐらいにヨーロッパ写真美術館(Maison Europeenne De La Photographie)はある。18世紀に建てられた貴族の館をパリ市が買い上げて常設の写真展示美術館としている。5つのフロアーに分かれた展示会場があり、訪れたときは‘An American Season’とのテーマの下に5人の作家の展示が行われていた。右の写真はMEPの



Maison Europeenne De La Photographie

パンフレットだが、5人の作家のうちの1人 ANDRES SERRANO のホームレスをテーマにした作品を表紙として使っている。

今回は美術館の見学に合わせて、館長のジャン＝リュック・モンテロッソ氏を最初に訪ねた。これはZOOMS JAPAN 入選者の恩田大輔氏の作品「絶景に魅



アメリカ人写真家アンドレス・セラノの作品が表紙になったMEPのパンフレット



恩田大輔氏と山本雅紀氏のポートフォリオを見てコメントを述べるジャン＝リュック・モンテロッソ氏



ブレッソンの写真集を出して解説するライブラリー担当者

せられる人」と山本雅紀氏の作品「I'm home」を見てもらうという、約束がとれていたの、2人とも入選作品のポートフォリオを持参した。モンテロッソ氏から、簡単な美術館の解説の後に、2人の作品を見てもらえた。モンテロッソ氏は、20年前のヨーロッパ写真美術館開設の時から館長で、パリフォトの開催にも大きくかかわっている人であり、数年前のCP+に来て講演したこともある。このような著名な方に、写真を見てもらうことができるのは素晴らしい。

モンテロッソ氏は、親切に2人の作品を見てくれて、山本氏と恩田氏の作品を買い上げることを約束した。それぞれに価値を見つけ、買い上げを



ANDRES SERRANO のホームレスをテーマにした作品コーナー



動物園の檻のなかにいる動物を悲しそうな感じに撮影したDINA MICHENERのANIMA, ANIMAL

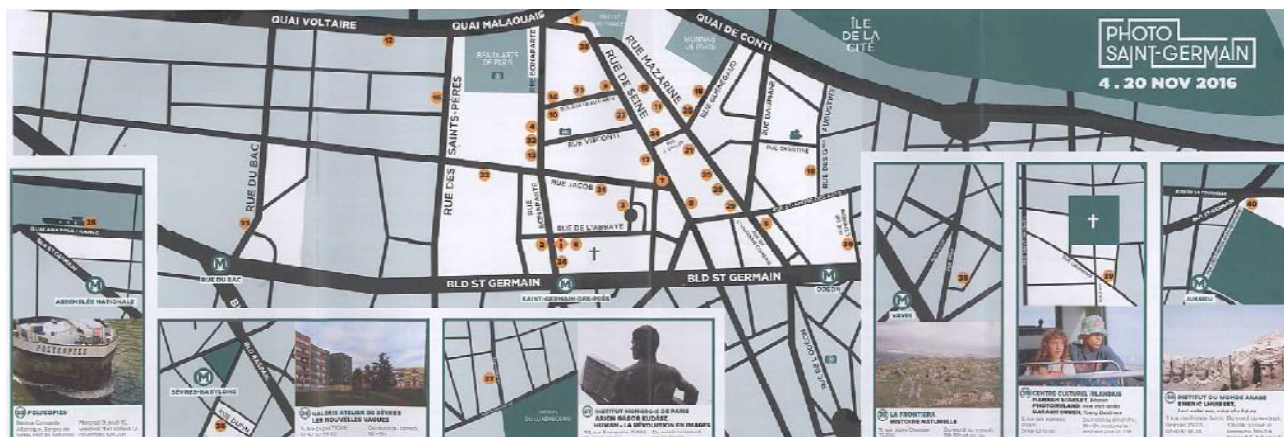
約束してもらったことは、日本から来た若い2人にとってZOOMSは最高の賞だと思う。

なお、ヨーロッパ写真美術館には、写真展示会場のほか、写真図書、動画などのライブラリー、講演などを開ける劇場型のホールもある。

■フォト・サンジェルマン（11.4-20）

フォト・サンジェルマン（Photo Saint-Germain）は、船上で写真集を展示即売するPolycopies（左下）などを含めて、サンジェルマン・デ・プレ地区にある40のギャラリーがパリフォトの開催期間に合わせて写真展示を行うイベントだ。

それぞれのギャラリーでは特定の作家の写真を



40のギャラリーが参加するフォト・サンジェルマン（パンフレットのマップより）



地下鉄サンジェルマン駅近くの la hune (YELLOWKORNER) では荒木経惟の作品展示が行われ、写真集が販売されていた



荒木経惟のセンチメンタルジャーニーのコンタクトプリントと平積みになった写真集

飾っているが、22の「Galerie Mouchet」では細江英公の薔薇刑を展示をしていた。また、パンフレットを細かく見ていくと、日本人写真家の作品が展示されているギャラリーをいくつか見つけることができた。

フォト・サンジェルマンに参加していないようでも、この地域にはギャラリーが多く、写真を扱っているギャラリーも目につく。昨年も訪れたが、パリ美術学校では10日から13日までの間写真集などの書籍販売を出版社が持ち寄って展示即売する「OFF PRINT」(<http://offprint.org/>)が開かれている。



街角で写真を売る人、見る人



セヌ川に停泊する船上で写真集を展示即売する Polycopies



Polycopies では本の即売会に加え、船倉では小さく間仕切りされ写真展も開かれていた



マップの中央上部にあるパリ美術学校 (beaux-arts de paris) では、OFF PRINT と呼ばれる写真書籍の販売が行われ、日本からの参加者も見つけられる。建物は17世紀に建てられた修道院跡で歴史を感じさせる。地図にはカメラのアイコンがついていて撮影スポットでもある



街角のギャラリー



ビエブル駅から歩いていくと住宅街が途切れたところにフランス写真博物館がある



㊦ 1960 年ごろのフィルム自動販売機。1 本 200 フランだったようだ。㊧ 同年代、コダックフィルムの現像回収ボックス



1940 年ごろのフォクトレンダーのカメラの組み立て。カメラはベッサⅡだろうか。古い資料写真は豊富なようだ

■フランス写真博物館

今回のパリ訪問では、念願のパリ郊外ビエブルにあるフランス写真博物館 (Musée Français de la Photographie、www.museedelaphoto.fr)を訪れることができた。この博物館は1948年に個人で収集した写真、カメラ機材などの博物館として設立されたが、その後市立となり、現在では県立となっている。2013年に訪れたときには休館中、2015年には改装中で、なかなか見学の機会はなかった。実は、この博物館は1985年にフランス政府の招きでフランスの写真工業界を視察した時に見学したことがあるのだが、その時は多くのカメラ、古写真



木製カメラ、首押さえ台、書割、古い写真などが並ぶ



左奥は、アップルのクイックテイク100、このあたりが最新カメラということになるのだろうか

が展示されていて、お年寄りのご夫婦がいて、女性が写真の修復をしていて、庭には池がありガチョウが泳いでいたり雰囲気ある博物館だった。

今回訪れてみると、長らく閉館していた理

由がわかった。博物館敷地内のメイン展示室は当時のままだが、入口アプローチが正面でなく、脇からに変更されていた。さらに外観は当時のままでも、内装はすっかり変わり、1階が展示室、2階がAVルームを兼ねた会議室のようになっていた。庭の池はそのままだが、別に小さな集会所のような建物も建っている。つまり大幅な改装を行っていたのだ。現在は、開館中で、休館日は月・火曜日、開館時間は13:30-17:30までとなっている。内部は改装されたというだけあって、かなりすっきりと見せてくれるが、30年前にあれだけ展示されていた収蔵物はどこにいったのだろうか。

展示されているカメラ、資料の豊富さは日本カメラ博物館に及ぶものではないが、写真発祥の国らしくさまざまな資料がある。とくにWebから検



博物館スタッフと記念撮影



LE-BAL の「PROVOKE」展示会場。多くのフランス人が日本の 70 年代学生運動や三里塚闘争の動画記録を熱心に見ていた

索、閲覧できるデータベース化された各種資料画像は素晴らしく、子細に閲覧できるのがいい。このあたりの作成も長期休館の理由だったのだろう。ただカメラの展示は初期のフランス製カメラから 1994 年の Apple QuickTake100 ぐらいで止まっている。しかし写真が約 180 年かけて、銀板⇒湿板⇒乾板⇒フィルム⇒固体撮像素子と変遷してきた流れのなかにあつては、これでいいのかもしれない。

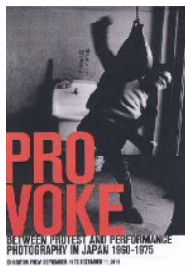
訪問した日は土曜日だが、訪れる人は多かった。このビエブルの町は、毎年 6 月の第 1 日曜日には早朝から中古カメラ市が開かれるので、かつては日本からの買い付け業者も訪れているが、あまり知らされていないのは、業者買い付けの場所という性格から紹介されなかったのだろう。

交通は、パリ市内モンパルナス駅から N-Line でベルサイユ シャンティエ (Versailles Chantiers) で RER-C1 に乗り換え、ビエブル駅 (Bievres) へは、モンパルナスから約 25 分。ビエブル駅からは徒歩で博物館まで約 25 分、バスだと 3 つ目のバス停ショレット (Cholette) を下車。バスは 1 時間に 1 本しかない。パリ市内からタクシーで約 40 ユーロ。帰りは博物館で呼んでもらうことになるが、なかなかつかまらないので注意が必要。

■パリは日本の写真がブームだけど

今回のパリ訪問にあたって注目したのは、日本人写真家の作品が、どれだけ現地で受け入れられているだろうかということだった。

LE-BAL という書店と居酒屋を兼ねたイベント会場に行くと、9 月 14 日～12 月 18 日の間に POP UP JAPONAIS 「PROVOKE」という名のもとに、日本の写真集の販売と作品展示が開かれており、1960 年代後半のプロボーク誌、三里塚成田空港闘争、大学紛争の写真集などが展示されている。ここでは写真を見せるというより、当時の写真集を分解してコピーして展示という形をとっていたが、北井一夫の三里塚を別にすれば、学生運動当事者による写



プロボークのパンフレット



パリ東駅では森山大道の「SCANDALOUS」を展示

真記録というような内容からして、オリジナルプリントの展示は不可能なのだろう。このほか、組織化された三里塚闘争の記録は動画もあり、フランス人が熱心に見ているのが印象的だった。

またこの期間、パリ東駅の駅前広場の周囲を森山大道の作品がパネルで飾っており、さらに駅コンコースには天井からタペストリー状に展示されているのを見ることができた。

ここ数年私の周りでもパリフォトを訪れている人、ギャラリーを通してコレクションとして写真を販売している人も複数いる。今日、日本のカメラが世界を席巻しているのは紛れもない事実だが、表現という写真の分野でもある一角を確保してきたようだ。このあたりの詳細な分析は筆者の得意とする分野ではないが、専門の大学の先生方にもぜひとも考察をお願いしたいところだ。

☆ ☆ ☆

なお、今回の報告は、カメラ映像機器工業会 CP+ 実行委員会メンバーの方々の訪問に同行させていただいた行動の一部であり、この場を借りて関係各位に深く感謝する次第であります。

(本報告は過去の 2013 年、2015 年のレポートと合わせてご覧いただくと、より詳しくご覧いただけます)